

「男爵薯」に挑み続けて

(独)農研機構北海道農業研究センター

研究調整役 森 元幸

私は1982年4月に北海道農業試験場に就職し、ジャガイモと出会いました。それまでも食べたことはありましたが、存在をはじめて認識しました。5月上旬に植付し月末には地表が割れ芽を出したかと思うと、草丈がどんどん伸びます。7月に入ると育種圃場は白・赤紫・青紫・青の綺麗な花畑になり、芽が出て3ヵ月足らずの8月末にはもう収穫でした。

「男爵薯」は標準品種として、系統選抜圃場に植えられていました。生育調査結果と照し合せながら1畦毎に選抜をするのですが、いもの形が凸凹で目の深い「男爵薯」を○とは判断できませんでした。ところが諸先輩や農業関係者の多くは、「男爵薯」に似た形をし、多収で疫病に強く、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性があれば良い、と言われました。

困惑した私は、ある民間育種家との出会いに救われました。「商品開発における育種の神髄は、10人中10人に褒められたアイデアは捨てろ、少数が面白いけど難しいというアイデアを採用せよ。さらに育種の取り分は3割、全部自分の成果だと思おうのは大間違い。育種に生産と販売(加工)を加え取り分は3割ずつ、3人の馬鹿が揃って新品種は普及する。利益の残り1割は消費者のもの。」との教えです。

そこで考えました。食卓に上るジャガイ

モは、用途に応じた調理適性を持つことが求められており、見た目も消費者を惹き付ける魅力あるものでなければならない。加工原料用にとって歩留まりが最重要であり、高収量かつ高品質が必要である。計算機で割り切れる理論から握み所のない感性まで、様々な分野の知恵を、注ぎ込んでこそ新品種は普及します。前述の3人の馬鹿が揃って「さやか」「インカのめざめ」「はるか」など多数の品種が育成されました。下手な鉄砲も数撃てば当たると非難されますが、そもそも撃たなければ当たりません。消費構造が大きく変わった今でも、やっぱり「男爵薯」だよねと言われますが、心の中で哀れみ笑い飛ばしています。

2013年11月にキャロライン・ケネディ駐日大使が着任したニュースを聞いて、故ジョン・F・ケネディ大統領の有名な演説が思い出されました。"Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country." (あなたの国が何をしてくれるかを問うのではなく、あなたが国に何が出来るとかを問いかけてください。)。 「国」を「ジャガイモ」に入れ替えてください。育種家は常に新品種育成を一生懸命、生産者も流通・加工・販売者も一生懸命、この情熱を上手く繋げて業界みんなで幸せにならしましょう。